地域を支え、共に生きる
復興にシニアの力

被災町民の証言集、民話同様語り継ぐ

東日本大震災で、山元町は町民630人余りが亡くなり、町域の4割近くが浸水する大きな被害を受けた。

庄司さんは、町民の震災体験をつづった証言集「小さな町を呑みこんだ巨大津波」を発行した、やまもと民話の会の代表。自らも被災しながら、60人以上から聞き取ったさまざまな話を、3冊の本にして出版した。震災から2年を迎えたことし3月には、小学館から1冊のハードカバー本となって全国発売された。

言い伝えは本当

庄司さんは、海岸から約1・2キロ内陸の坂元鎌沼地区に、家族とともに暮らしていた。60歳を過ぎてから民話の会に所属し、「語り継ごう」を合言葉に、昔話の聞き取りと、語りや書物による昔話の保存活動を行っていた。

津波はJR常磐線を越え、庄司さんは自宅ごと流され、九死に一生を得た。

「会の仲間を1人亡くし、隣近所の皆さんも亡くなった。私はたまたま助かっただけ。生き残ったメンバーと震災について語り合った時、どうにも納得がいかなくて。私も含め、なぜ逃げなかったのかと」

周りに海は見えず、住宅が並び、沿岸部には防潮林や防潮堤があった。

「仙台湾に面した仙台平野は津波が来ない、来ても被害が小さいと考えられていました。でも、民話の中には津波の話がたくさん残っていたし、私たちも語って聞かせていたのです」

坂元には津波伝承の話があり、国道6号の西にある追越の堤の水が塩辛いといわれているのは、昔そこまで津波が来たためと伝えられている。

仙台平野の大津波の歴史は、869年の貞観（じょうがん）津波がよく引き合いに出される。しかし、伝わる津波の規模では堤まで到達せず、話は成り立たないとされてきた。福島県相馬市や新地町に伝わる昔話も、年代や規模などで貞観津波と合致しなかった。

「だから単なる言い伝えとして受け取っていました。専門家の見解もそう。だけど今回、津波で流されながら、言い伝えはやはり本当だったんだと思いました」

津波は追越の堤の目の前まで迫ったという。

震災後、歴史学者により、1611年の慶長津波が仙台平野を襲い、甚大な被害を出した歴史が徐々に明らかになってきた。これは今回の津波を上回り、照らし合わせると、堤の話をはじめとした津波伝承が単なる言い伝えではなくなってくる。

「なぜか慶長津波の存在は知られておらず、地元のお年寄りも語り継いできませんでした。『常磐線を越える津波などない』というのが私たちの常識だったんですから。これは語り継がなければいけないと強く感じました」

防災に役立てて

「聞き取りでは家族や友人を亡くし、語りづらいことを語ってもらって感謝している」と語る。

避難所にいたころからさまざまな人を訪ねた。物資がまだ届かない状況で、包丁で鉛筆を削ってメモしたという。

「真実を語り継ぐのだから、早ければ早いほどいい。被災したその場で、みんなの素直な思いを聞くのが大事。書き方も、聞き取ったことをそのまま文字にするよう努めました」

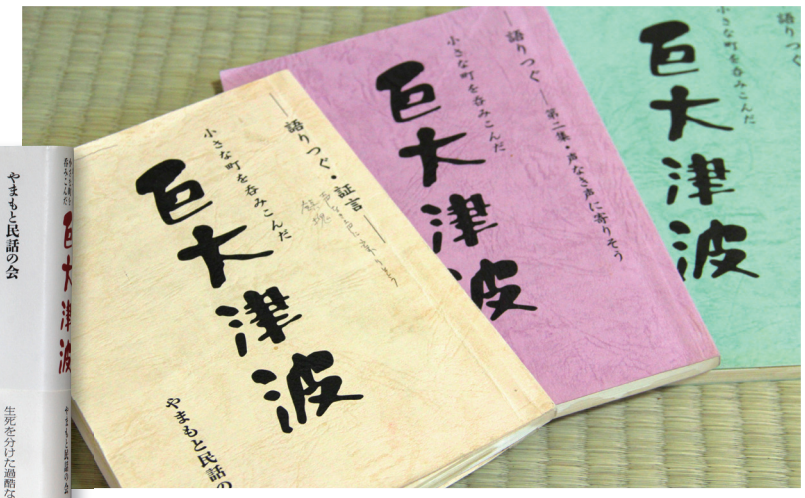
2011年夏から翌年春まで、全3集を相次いで出版した。

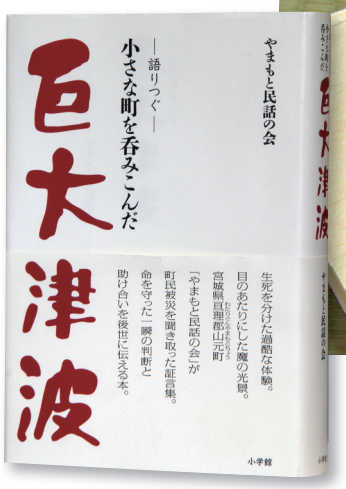
証言集は被災体験だけでなく、行政区長や民生委員、炊き出しをした食生活改善推進員といった、さまざまな立場の町民の震災時の活動も書き留めてあるため「今後の防災・減災に役立つ」と確信する。

出版してから講演依頼やラジオ出演依頼がたびたび舞い込むようになった。そこで津波の恐ろしさを伝え、備えの大切さを説いている。

夫と息子夫婦、孫の家族5人、愛犬と一緒に山元町の山沿いの新しい家に暮らす

やまもと民話の会（山元町）
代表　庄司アイさん（78）





▶やまもと民話の会発行の証言集「小さな町を呑みこんだ巨大津波」（1冊500円）は山元町共同作業所・工房地球村で、小学館書籍（1500円・税別）は主な書店で販売している

【やまもと民話の会】
1998年発足。山元町内に残る民話を採集し、語りや書物化などで保存・伝承活動を行っている。町内の70、80代の女性7人で組織。